

2018年4月22日(日) 近畿旧友会ハイキングクラブ「燦歩会」例会 (第469回)

さんぽかい

うだまつやま  
「宇陀松山城跡から情緒ある町並みを訪ねる (奈良)」



全国的に高い気温が続出したこの日、宇陀市の最高気温は25度9分、湿度46%、西北西の風2m。気持ちの良い、最高の燦歩日和です。

近鉄大阪線榛原(はいばら)駅からバスで20分、宇陀市の道の駅では、明るく賑やかなツバメのさえずりが聞かれました。

今年の春(というか初夏というか)は、例年より半月、季節が先行しているようです。



参加者は17名(男性11、女性6)、先ず阿騎野(あきの)に向かいます。

宇陀は、推古天皇の時代に薬狩りが催されたことが『日本書紀』に記されている程の歴史の古い土地です。薬狩りは宮中行事で、男性は鹿の若角を採り、女性は薬草を摘みました。

万葉集には、軽の皇子(かるのみこ 後の文武天皇)が、歌人柿本人麻呂らとこの地を訪れ、狩りをしたとあります。その時に詠われた歌の一つが、

「東の野にかぎろひの立つ見えて かへり見すれば 月かたぶきぬ」(巻1-48)です。この歌の2つ前に、「安騎の野に宿る旅人……」とあり、それが、この辺りと云う事なのです。高台に歌碑が建てられ、公園になっていました。



丘を少し下った所にあるのが阿紀神社、平安時代の神社リスト「神名帳」にも載せられている歴史ある神社です。能舞台も備えた、清楚で荘厳なお社でした。

南西へおよそ1km、「又兵衛桜」に向かいます。

1615年の大坂夏の陣に敗れた武将後藤又兵衛が、後この地に暮らしたと伝えられ、その屋敷跡に育った桜の巨樹が、花の時季には、多くの人を呼んでいます。

といっても今は葉桜の季節、雄大な若葉の又兵衛桜を望みながら、東屋でゆっくり昼食を頂く事が出来ました。(見頃の又兵衛桜については、文末の「補足・蛇足」をご覧ください)

大宇陀の町に戻る途中で、立ち寄った阿騎野・人麻呂公園。  
遺跡調査で建物跡なども確認、復元されています。  
騎乗し東の方を眺める柿本人麻呂像の前で、全員写真です。



ここからは近世の宇陀を燦歩します。  
町の東にそびえる古城山は標高471m（町からの高さはおよそ110m）です。  
南北朝時代には既に、地元の土豪秋山氏の山城が築かれていたようです。（秋山城）  
秋山氏というのも、「阿騎野」「阿紀神社」「安騎」などと音が通じますね。  
戦国の争乱の中で、豊臣秀吉の弟秀長の家臣団が入り、城として整えられます。  
そして1600（慶長5）年、関ヶ原合戦の功で、福島正則の弟孝治（高晴）が城主として  
入ります。石高は3万石、この頃に城も町も、「松山」に改められたと考えられています。

当時から残っているものがあります。  
城の西口関門（黒門）で国の史跡に指定されています。  
南北に流れる宇陀川の傍ら、簡素ですが厳めしい黒い門。  
城に入るには、先ず外堀の役目を持つ宇陀川を越え、  
門と鍵の手に曲がる枡形を破らねばなりません。  
この門の内側は、城へ続く大手筋で、武家屋敷が建ち並び  
城山の周囲を固めていたのです。



山裾を南に巻きながら、城跡に登ります。鞍部に辿りつくまでおよそ100m、ほぼ直登でした。  
後で地図を調べると、等高線にまっしぐらに向かっていたことが分かりました。  
武士や足軽たちは、よくもまあこんな坂道を、重い刀や槍を下げて登り降りしたものです。  
喘ぎつつ休みつつ25分程で、頂上の本丸跡に辿りつきました。国の史跡「宇陀松山城跡」です。



幅も奥行きも50mほどの広場です。  
長年にわたる発掘調査の結果、  
この広場の周囲を櫓が取り囲み、手前の広い所に本丸、  
奥の一段高い所に天守があった事が分かっています。  
本丸には広間や書院、家臣達の詰所、台所等が建っていました。  
発掘された桐の紋の鬼瓦は、高さ70cm程の立派なものです。  
(写真=大宇陀町教育委員会の特別展図録より)  
本丸・天守の規模を推し量る事が出来るでしょう。



しかし、城は1615（元和元）年に破却されます。  
大坂夏の陣で豊臣氏が滅び、全国に平和が訪れた年で、  
戦いの終わり「元和偃武（げんなえんぶ）」と呼ばれました。  
もはや城は不要という事で、一国一城が宣せられて、  
全国特に西国で、400もの城が瞬く間に壊されます。  
松山城の破却には、茶人大名としても作庭家としても  
知られる小堀遠州が当たったという事です。



もともと、その前に城主福島孝治（高晴）はわがままな振舞いの故に職を解かれ、  
伊勢山田に蟄居を命ぜられていました。  
そして破却の直後に、領主は織田信長の次男信雄（のぶかつ）に替わります。  
更に、1695（元禄8）年には幕府の直轄領になる事で、  
宇陀松山は城下町から商業の町に変貌して行くのです。

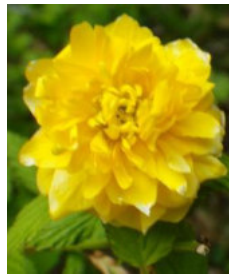
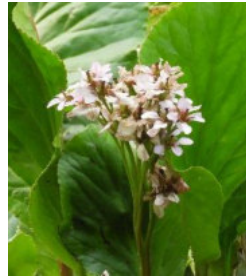
この地は伊勢、熊野、和歌山などに通じる十字路のような交通の要衝でした。  
伊勢参りの旅人も多く、また伊勢や熊野からは魚や塩が入り、宇陀松山からは特産の宇陀紙や  
葛・油・薬などを送り出していたのです。  
流通・交易の盛んな事から、こんな風に云われたそうです。  
「吉野で出来て宇陀紙、宇陀で出来て吉野葛」 産地と呼び名がクロスする程だったのでしょう。

いま松山は、重要伝統的建造物群保存地区に選定され、趣のある古い町並みが残されています。  
瓦屋根に漆喰の壁、通りに面した渋い木の格子、2階部分に開けられた虫籠窓（むしごまど）。  
ちょんまげの商人がスッと現われて来そうな街並みです。  
看板にも意匠が凝らされていて、楽しい散策でした。



燦歩の最後に、薬草園「森野旧薬園」(国史跡)を見学しました。

1729(享保14)年以来、葛粉製造の傍ら、裏山に250種類の薬草を栽培して来ました。案内して頂きながら、薬草の花々を楽しみました。



俄かに夏日になったこの日、熱中症になる人も無く、15時半過ぎのバスで、帰途につきました。

\* \* \* \*

相変わらずの補足・蛇足で失礼します。

### 1 宇陀崩れ(うだくずれ)

今回の燦歩で初めてこの言葉を知りました。いわゆるお家騒動です。時代小説・映画そのものの筋立てと云うよりは、そのモデルになったのかと思う程です。1615(元和元)年に領主になった織田信雄、その3代後の織田信武の時代です。

窮乏する藩財政、その建て直しを巡って対立する古参の重臣と、殿お気に入りの新参の用人。用人は殿の威を借りて、山野田畑の開墾・殖産興業でバブリーに稼ぎ、しかも多くを自分の懐に入れ、殿にだけ貢ぐ…。

何か起こらない筈はありません。数年来のくすぶりは、1694(元禄7)年9月に破局へ。諫言する重臣1人を殿が手討ち、もう一人を上意討ち。そして殿様も、ひと月後に自害して果てます。幕府も放っておけず、翌年宇陀松山藩は取り潰され、幕府の直轄地となります。

先の城主は改易蟄居、今度はお家騒動で藩取り潰し。つくづく、領主に恵まれなかったという事でしょうか。

### 2 又兵衛桜のこと

又兵衛桜は、樹齢300年という巨樹。幹回りは3m、樹高は13mあります。その上、高台にあるため、威容が見事です。別名「瀧桜」と呼ばれるのも頷けます。ご記憶の方も居られるかもしれません。2000年の大河ドラマ「葵 徳川三代」のタイトルバックに、登場していました。物見高い私も、その年花見に来ておりました。その時の様子です。



### 3 きみごろも

立派な看板に惹かれて、お菓子の「きみごろも」を食べてみました。なかなか結構でした。

一見、厚揚げの様にも見えますが、食感は「ふわふわ!!」卵白をメレンゲにして、卵黄をつけて焼いたという感じです。黄と白の色合いも良く、程よい甘みがやさしいお菓子でした。



### 4 ばくちの木

森野旧薬園にこんな名前の木もありました。  
博才が伸びるとか……???.  
落ち葉を、そっと財布に入れる会員も居られたようですが。  
果たしてご利益は???

#### 【蛇足の蛇足】

本当はこの木の灰色の皮がはげ落ちて赤黄色になる事から、ハダカギとも呼ばれ、「博打に負けて裸になる」と云う意味だとか……。とすれば全くの逆効果かも知れませんね。



\* \* \*

### ご 案 内

旧友会員の方、職員の方、入会大歓迎です。

入念な下見を行い、中途離脱も可能なルートを設定して、**毎月第4日曜日**に歩いています。  
メンバーはおよそ50名、その日の都合と体調に合わせて自由参加です。

(事前に予約が必要な場合もあります)

- 今後の予定
- 5月 「茶源郷」和束 緑波の茶畑と新茶の薫り (京都)
  - 6月 大正街歩き、渡船に乗って沖縄の風を感じる (大阪)
  - 7月 光秀ゆかりの福知山城と御霊神社を訪ね、由良川で治水の歴史を学ぶ  
(青春18切符を利用 京都)
  - 8月 暑さを避けて 休会
  - 9月 六甲の自然を取り込んだ広大な神戸市立森林植物園を楽しむ (兵庫)
  - 10月 京都トレイル第2回 伏見稻荷から蹴上へ (京都)
  - 11月25・6日 若狭・三方五湖と鯖街道を歩く (1泊2日のツアー)
  - 12月16日 納会 (大阪)
  - 1月 エキゾチック!世界宗教寺院めぐり (兵庫)
  - 2月 日野ひな祭り紀行と町並み散策 (滋賀)
  - 3月 華岡青洲の里を訪ねる (和歌山)

参加ご希望の方は、山村恵一さんにご連絡下さい。(電話 0743-20-4159)  
ご一緒に気軽に楽しく歩きましょう。

生島 (おじま) 幸弥 記